| １８ | 豊田 | 豊田市立畝部小学校 | ハナト　チカ<br>氏名　　鼻　戸　千　華 |
|---|---|---|---|

| 分科会番号 | 8 | 分科会名 | 音楽教育（小学校） |
|---|---|---|---|

**研究題目**

**拍にのってリズムを感じ取り、友達と関わりながら生き生きと音楽表現する子の育成**
**―　小学１年音楽科「はくにのってリズムをうとう」「みんなであわせてたのしもう」の実践を通して　―**

## １　はじめに

本学級の児童は、明るく元気で、何事も前向きに楽しんで取り組むことができる児童が多い。本題材の授業を行う前に実施したアンケートでは、学級２３人中２０人の児童が音楽が好きと答えており、音楽の授業に楽しんで取り組むことができている。実際に、前期に学習した「セブンステップス」と「ひらいたひらいた」では、ペア活動、グループ活動、学級全体での活動という段階を踏みながら、楽しく音楽に合わせて体を動かす様子が見られた。また、一人より友達と活動する方が楽しいという質問に答えた児童は２３人中１４人であり、多くの児童が友達と一緒に楽しんで音楽の授業に取り組むことができている。しかし、児童を見ていると、「みんなで楽しく手拍子しているが、どんどんはやくなってバラバラになっている」「友達と“音楽に合わせて”ではなく“自由に楽しく”体を動かしている」等の様子が見られ、本質的な意味での“友達と音楽活動をする楽しさ”を味わえていない。

学習指導要領には、音楽科の目標として「楽しく音楽に関わり、協働して音楽活動をする楽しさを感じながら、身の回りの様々な音楽に親しむとともに、音楽経験を生かして生活を明るく潤いのあるものにしようとする態度を養う。」とある。音楽活動は音によるコミュニケーション活動であり、友達の音がぴったりと重なり合った瞬間や学級のみんなで一つの音楽を創り上げた時の感動や達成感は大きな喜びとなり、次への意欲や自信に繋がると考える。また、そういった協働経験が児童同士の心の繋がりを深め、友達と関わり合いながら音楽に親しむ態度を養っていくと考える。

本研究では、音楽が揃わずバラバラになってしまう原因として、拍のずれがあると考え、歌唱・音楽づくり・合奏等、全ての音楽活動において基盤となる「拍」に重点を置いた。そして、テーマを「拍にのってリズムを感じ取り、友達と関わりながら生き生きと音楽表現する子の育成」とした。本研究を通して拍感やリズム感を身に付けるとともに、友達と合わせるという意識を育てることで、「みんなの音がぴったり揃った」という成功体験を重ね、友達と一緒に音楽活動をする楽しさを味わってほしい。また、題材のゴールを明確にし、同じ目標に向かってペアやグループで活動に取り組むことで、友達と関わり合いながら進んで生き生きと音楽活動に取り組める子に育ってほしいと願い本研究に取り組んだ。

## ２　目指す子ども像

拍にのってリズムを感じ取り、友達と関わりながら生き生きと音楽表現する児童

## ３　仮説と手だて

**【仮説１】**

拍やリズムを体全体で感じる体験を積み重ねれば、楽しみながら拍感やリズム感を体得できるだろう。

**手立て①　常時活動におけるリトミックとリズム遊びの実施**

常時活動においてリトミックやリズム遊びを取り入れる。音楽に合わせて体を動かす活動を積み重ね、楽しみながらリズム感や拍感を身に付けられるようにする。

**手立て②　言葉や身体表現を通して拍やリズムを感じ取る活動の実施**

言葉の中にあるリズムに着目し、音符を児童の身近な言葉に置き換え、言葉にのせてリズムを体感的に捉えられるようにする。また、曲に合わせた振り付けを考える活動を通して、拍の流れやリズムにのる感覚を身に付けられるようにする。

**【仮説 2】**

学習のゴールや音楽の仕組みを視覚化すれば、互いの考えを伝え合いながら、友達と関わり合って生き生きと音楽活動に取り組むことができるであろう。

**手立て③　マスターラリー表による学習のゴールの見える化**

マスターラリー表を掲示して毎授業の学習のゴールを見える化する。一つ一つの課題をクリアする達成感を味わえるようすることで、同じ目標に向かってペアやグループで協働的に音楽活動に取り組むことができるようにする。

**手立て④　音楽の要素や仕組みを視覚化した教具の工夫**

色分けしたリズムカードや合奏のモデル演奏動画等、教具を工夫して音楽の要素や仕組みを視覚的に捉えやすくする。児童の気付きを深め、思いや考えを言葉にしやすくする。

**手立て⑤　ペア活動やグループ活動における交流の場の設定**

ペア活動やグループ活動を取り入れ、協働的に話し合う場を設定する。互いの考えを伝え合いながら友達と関わり合って音楽活動に取り組むことができるようにする。

## 4　抽出児童について

本研究を検証するために抽出児童Ａを設定し、その変容と学級全体の様子から仮説の検証を行う。

| Ａ児の実態 | 目指す姿 |
|---|---|
| 音楽にのって体を動かしたり、拍を打ったりする活動に楽しんで取り組める。しかし、周りの音を聞いておらず、拍がずれてしまう様子が見られる。また、自分勝手に行動したり、自分の考えを上手く伝えられなかったりすることがあり、友達と協働して活動することが難しいときがある。 | ・拍やリズムを意識し、みんなと合わせてリズムを打つ楽しさを味わい、進んで音楽活動に取り組むことができる。<br>・友達と協力しながら、ゴールに向かって活動に取り組むことができる。 |

## 5　実践と考察

### （１）「はくにのってリズムをうとう」(中心教材「ことばでリズム」)の実践

**ア　リトミックとリズム遊びの実施(手立て①の検証)**

題材を通して、常時活動としてリトミックとリズム遊びを取り入れた（資料１）。リトミックでは、ピアノの音に合わせて動く・止まるの動作を行った。Ａ児は、楽しくリトミック活動に取り組んでいたが、動く・止まるの動作のみに意識が向いており、拍に合わせて動いている様子はなかった。他の児童も、音楽や拍に合わせてではなく、自由に楽しく動いている姿が多く見受けられた。そこで、既習曲「さんぽ」での活動を振り返らせ、拍に合わせて足踏みしたことを思い起こさせた。すると、ピアノの音をよく聴き、曲に合わせて動く姿が見られた。拍に合わせて動いている児童を褒めることで、Ａ児もその姿をまねて、拍に合わせて動くことができ

【資料１】リズム遊びに取り組む様子

るようになっていった。また、テンポをかえ、繰り返し活動を行っていくと、「今はゆっくりだからゾウさんみたいに歩こう」「速くなったから、足踏みを合わせるのが大変」などと、拍の間隔とテンポの関わりに気付き、拍を意識して活動に取り組む児童が増えた。

前題材で行ったリズム遊び「なまえあそび」「フルーツランド」も常時活動として取り入れた。ビートボックスを流しながら、拍を意識して活動に取り組んだ。A 児ははじめの頃、上手くリズムに乗れず、入りがずれてしまっていた。繰り返し活動を続ける中で、A 児自身が「なんか、はじめが合わない」とつぶやき、拍のずれに気付いている様子が見られた。B 児が「はい！って入れると入りやすい」と発言し、（資料２）休符の部分で「はい！」という掛け声を入れることになった。すると、拍の流れにのってスムーズに入ることができるようになっていき、学級のみんなで拍にのってリズムを合わせる楽しさを感じることができていった。慣れてくると、「はい！の掛け声なしでチャレンジしたい」という声が挙がり、A 児も掛け声なしでビートボックスに合わせてリズム打ちできるようになっていった。また、ビートボックスとリズムのずれに気付き、「今入るところが合ってなかった」と友達に教える姿も見られた。学級みんながビートボックスに合わせて止まらずにリズムリレーできた際には、「みんなでぴったりたたけた」と喜ぶ姿が見られた。

B 児：「はい！」っていうと入りやすい！

C 児：私も！ぼくも！

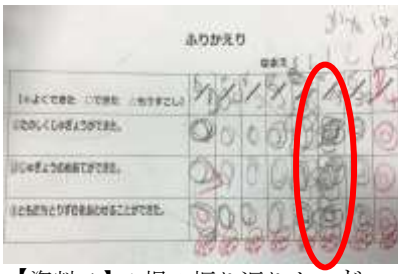
A 児：リズム(ビートボックス)と手拍子がピッタリ合うと気持ちいい！

【資料 2】授業記録

**イ　リズムマスターになってたんたたレストランへいこう！(手立て③の検証)**

児童自身が楽しみながら本題材に取り組めるように、「リズムマスターになって、たんたたレストランへいこう！」という題材のゴールを設定し、題材の大きなゴールだけでなく、毎時間の授業で目指す姿を児童自身が捉えられるように、リズムマスターになるまでの道のりをマスターラリー表にして掲示して取り組むこととした（資料３）。毎時間授業の最初にマスターラリー表を見て、本時に目指す目標「○○マスターをめざそう」を確認し、マスターになるためにペアやグループでの課題を与えることで、児童が活動内容に興味関心をもち、意欲的にペア学習やグループ学習に取り組むことができるようにした。また、マスターをクリアするごとに、ラリー表にモンスターボールを貼っていった。「○○マスターになる」という同じ目標をもって活動することで、意欲的にグループ活動に取り組むことができ、A 児は、「次は何マスター？」「あと２つでリズムマスターになれる！」と次の授業を楽しみにする様子が見られ、学級みんなで一緒に１つ１つ課題をクリアしていく達成感を味わうことができた。

【資料３】マスターラリー表①




【資料４】A 児の振り返りカード

**ウ　リズムマスターになろう！**

**～リズムにぴったりあうことばをさがそう～(手立て②の検証)**

教科書に出てくる食べ物のイラストカードを見せ、どちらのリズムに合うか手拍子させた。「3 文字の言葉はたんたんたんうんのチーム」「5 文字の言葉はたたたたたんうんのチーム」という児童の意見を生かしていくことで、言葉をリズムにぴったりと当てはめることができた。そして、リズムを言葉に置き換えて、言葉を唱えながら手拍子することで、「たた」の８分音符が拍の流れにのってリズム打ちできるようになった。他の食べ物でもリズム打ちを行った。「からあげ」という４文字の言葉が出ると、C 児がすかさず「4 文字だからどちらにも合わないよ」「たんが１つ多いよ」と発言し、２つのリズムの違いを捉えられ

【資料５】ことばでリズム

ていることが分かった。ペアやクラス全体で、言葉のリズムリレーを行うと、好きな食べ物を選んで唱えながら、拍の流れにのって楽しみながらリズム打ちする様子が見られた。A 児も、ペアの児童と楽しそうな表情でリズム打ちをしていた。その日の振り返りカードには、どの項目にも花丸がついており友達と楽しみながら活動に取り組めたことがうかがえる（資料４）。また、後日、児童から挙がった食べ物を学習の足跡として掲示すると（資料 5）、それを見ながら休み時間にも友達とリズム打ちに取り組む様子が見られた。

**エ　リズムリレーマスターになろう！～リズムをともだちとつなごう～（手立て④⑤の検証）**

毎時間、必ずペア活動やグループ活動を取り入れ、子どもたちが互いに協働して学べる場を設定した。「ことばでリズム」の教材では、児童から出た食べ物をメニュー表にまとめそこから一人一つ好きなメニューを選び、グループでつなげてリズム打ちする活動を行った。メニューを書いたリズムカードを用意し、ホワイトボードに貼って並び替えられるようにした。また、リズムカードは、リズムの違いを視覚的に分かりやすくするために、「たんたんたんうん」はピンク色に「たたたたたんうん」は水色に色分けした(資料 6)。また、色分けしたことで、音楽の仕組みである「反復」と「呼びかけ」を視覚的に理解できるようにし、さらに、児童に馴染みのある「くりかえし」と「組み合わせ」という言葉に変えて学習した(資料 7)。

【資料６】リズムカード

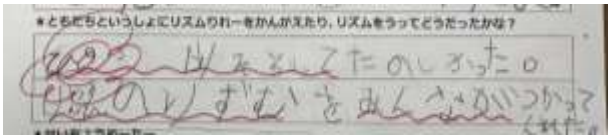
【資料７】つなげわざ

グループで好きなメニューを選ぶ場面では、どの児童も何にしようか悩みながら、楽しそうにリズムカードを選ぶ様子が見られた。A 児は、「りんごパン」を選んだ。次に、選んだリズムをグループでつなげた。A 児のグループは、他に「うなぎどん」「パスタ」「プリン」を選択して、はじめは、「①プリン②パスタ③うなぎどん④りんごぱん」の順にリズムをつなげ、内容が決まると自分たちでリズムの試し打ちを進んで行っていた(資料８)。その後、グループでの話し合いの中で、A 児から「くりかえししかないよ」という意見が出たことをきっかけに、「①りんごぱん②パスタ③プリン④うなぎどん」という、組み合わせを取り入れた並び順でリズムをつなげ直していた。全体発表では、A 児が発表者となって、「両方の技を使って、くみあわせ、くりかえし、くみあわせの順でリズムをつなげました」と、リズムの工夫した所を学級のみんなに伝えることができた(資料９)。

【資料８】グループ活動の様子

【資料９】全体発表での A 児

A 児は振り返りに、「じぶんのリズムをみんながつかってくれた」と書いており（資料 10）自分の考えを伝えられたことやそれをグループの友達が受け入れてくれたことに喜びを感じ、友達と一緒にリズムづくりをする楽しさを味わうことができた。


【資料 10】A 児の振り返り

**（２）「みんなであわせてたのしもう」(中心教材「とんくるりんぱんくるりん」)の実践**

**ア　３びょうしアンサンブルマスターになろう！(手立て③の検証)**

曲との出会いの際に、使われている楽器に注目して「とんくるりんぱんくるりん」を聴く活動を行った。児童は、聞こえてくる楽器の音色に耳をよく澄ませ、タンブリン、トライアングル、鍵盤ハー

モニカの３種類の楽器が使われていることに気付くことができた。児童の「今までに習った楽器が全部合わさってる！」というつぶやきから、学級の児童たちの中で「自分たちも習った楽器をみんなで合わせて演奏したい！」という願いが生まれた。そこで、「３拍子アンサンブルマスターになろう！」という題材のゴールを設定し、アンサンブルマスターになるまでの道のりをマスターラリー表にして掲示して取り組むこととした（資料 11）。

【資料 11】マスターラリー表②

**イ　３びょうしダンスマスターになろう！**

**～３びょうしに合わせてダンスをつくろう～(手立て①②⑤の検証)**

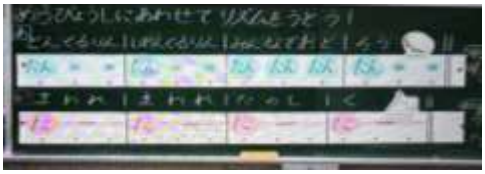
３拍子に対する感覚を育てるために、３拍子のリズムに合わせた振付づくりを行った。最初に、全体で音楽に合わせて２つの動きを行った。１つ目に、１拍目が膝、２・３拍目が手拍子のリズム打ちを行った。１つ目の動きに慣れ、体全体で３拍子を捉えられるようになってきたら、２つ目の両手を挙げて３拍で左右に大きく揺れる動きを行った。次に、あの「とんくるりんぱんくるりん」の旋律といの「まわれまわれ」の旋律では、２つの動きのどちらが合うかを考えさせた。B 児の「あは元気な感じでいは優しい感じがする」という曲想の違いに着目した発言が根拠となり、あは１つ目の動き、いは２つ目の動きが合いそうだと考えることができた。最後に、ペアで曲に合う振付を考え、身体表現を行った。A 児は、ペアの児童と向き合って手拍子をしたり、両手を繋いで左右に揺れたりして体を曲に合わせて動かしながら、楽しそうに活動する様子が見られた(資料 12)。どのペアも、あの３拍子を１拍ずつの拍打ちで感じ取る表現と、いの３拍子を１つのまとまりで感じ取る表現の違いを捉えて振付づくりを行うことができた。また、常時活動でリズム遊びとして毎時間ペアダンスを取り入れ、体の動きを通して３拍子の感覚をつかんでいく様子が見られた。

【資料 12】ペア活動の様子

**ウ　３びょうしリズムマスターになろう！**

**～３びょうしに合わせてリズムをうとう～(手立て④)**

あタンブリンといトライアングルのパートのリズム譜を提示し、手拍子させた。色分けしたり、休符や音の長さを視覚的に分かりやすくしたりすることで、２つのリズムの違いに気付きやすくした(資料 13)。実際に２つのリズムの違いについて問いかけると、C 児の「あは「うん」があるけど、いは「うん」がないね。」という発言を受けて、A 児は「だから、いは「たー」で音が長いよ。」と、音の長さに着目してリズムの違いを捉えることができた。他にも、A 児の発言から、リズムの長さと楽器の音の長さを関連付けて考える児童もいた（資料 14）。２つのリズムの違いを捉えたことで、休符や伸ばす音の長さを意識して、３拍子を感じ取りながらあといのリズムを打つことができた。


【資料 13】リズム譜

C 児：あは「うん」があるけどいは「うん」がないね。
A 児：だから、いは「たー」で音が長いよ。
D 児：あは「たん」で短いね。
E 児：タンバリンの音は「タンッ」って感じで、トライアングルは「チーン」って長いから、合ってるね。

【資料 14】授業記録

**エ　３びょうしぴったり合わせマスターになろう！**

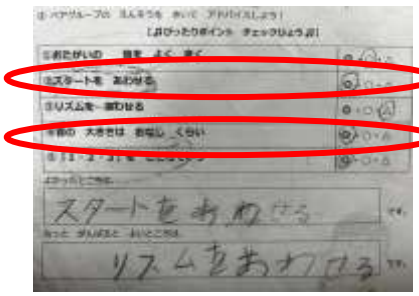
**～３つのパートをぴったり合わせえんそうしよう～(手立て④⑤の検証)**

グループでの合奏練習をはじめる前に、バラバラのモデル演奏とぴったり揃ったモデル演奏を視聴した。２つの演奏を比較することで、どうしたらぴったり合った演奏ができるか児童自身が実感を伴って理解し、考えられるようにした。A 児は、バラバラのモデル演奏を見て、タンブリンと鍵盤ハーモニカのリズムがずれていることに気付いた。どうしたらリズムが合うか問い返すと、みんなの音を

★ぴったりポイント★
① みんなの音をよくきく
② スタートをあわせる
③ リズムをあわせる
④ 音の大きさはおなじくらい
⑤ 「1・2・3」をこころでいう

【資料 15】

よく聴くことが大切だと答え、合奏のポイントに気付くことができた。その他、児童から出た意見をもとにぴったりポイント(資料 15)を決めて掲示し、練習の目標決めや演奏の振り返りの視点とすることで、「みんなで合わせる」という意識をもって練習に取り組めるようになった。また、より互いの音を聴き合って演奏できるよう、ピアノ伴奏なしで合奏に取り組んだ。練習の際には、聴き合いっこタイムを取り、ペアのグループとアドバイスをし合う時間をつくった。A 児は、グループでの目標を「スタートを合わせる」、自分の目標を「音の大きさは同じくらい」に設定して練習に取り組んだ。練習では、最初が揃うように「せーの」と掛け声を掛け合ったり、鍵盤ハーモニカの音が大きくなりすぎないように気を付けたりして演奏する様子が見られた。聴き合いっこタイムでは、ペアのグループから、目標に設定したぴったりポイントの項目に◎を付けてもらい(資料 16)、喜ぶ姿が見られた。また、トライアングルと鍵盤ハーモニカのリズムを合わせるとよいとアドバイスをもらい、次にがんばるぴったりポイントを「みんなの音をよくきく」に決めて、グループで本番に向けて練習に励んだ。本番の発表会では、その練習の成果もあり、３人でリズムをぴったり合わせて演奏することができた。その日の振り返りは、どの項目も◎で、「３人であわせてえんそうしてたのしかった。」と書かれており(資料 17)友達と一緒に演奏する楽しさやぴったり揃う喜びを味わうことができた。



【資料 16】ペアグループのアドバイス

【資料 17】A 児の振り返り

## 6　成果と課題

(１) 仮説１について

リトミックとリズム遊びを常時活動として位置付け、繰り返し行うことで、無理なく楽しみながら拍感やリズム感を身に付けることができた。特にリズム遊びでは、ビートボックスに合わせて行うことで徐々に拍を意識できるようになり、自分自身や友達の拍のずれに気付いてリズムを合わせることに意識が向けられるようになった。また、言葉のもつ自然なリズムを通してリズムを感じ取ったり、3 拍子のリズムに合わせて身体表現したりする活動を通して、体感を伴って拍やリズムにのる感覚を身に付けることができ、手立ては有効的であった。

（２）仮説２について

ゴールの設定を工夫し、毎時間の授業で目指す姿を明確にすることで、児童が一つ一つの活動に興味関心や意欲をもち、目標に向かって友達と関わり合いながら意欲的に活動に取り組むことができた。また、ペアやグループでの活動では、教具を工夫し、音楽の要素や仕組みを視覚化することで、それらと関連付けながら自分の思いや気付きを伝えることができた。互いに考えを出し合いながら協働してリズムづくりや合奏練習を進める中で、友達と一緒に音楽活動する楽しさを味わうことができ、手立ては有効的であった。

(３)今後の課題

とんくるりんぱんくるりんの合奏練習では、「今ずれたからもう一回！」と、互いの音をよく聴き合い、ぴったり揃うまで練習に励んでいた。演奏がぴったり揃うと、「先生きいて！」と嬉しそうに練習の成果を披露する姿がとても印象的だった。一方で、リズムだけなら拍が意識できたことが、楽器の演奏技能が必要になったことで、グループの音を聴き合うことや合わせることが難しくなる児童もいた。タブレットで演奏の様子を撮影することで、全ての児童が自分で客観的に演奏を振り返ることができるように支援する必要があったと感じた。また、一人一人の中では拍を感じ、流れにのって演奏できていても、そのテンポが異なるために、音にずれが生じてしまう場面が見受けられた。今後は、拍だけでなく、テンポにも意識を向けた指導を行い、拍にのってリズムを感じ取り、友達と関わりながら生き生きと音楽表現する子の育成に取り組んでいきたい。